

巻頭言 将棋の進歩

毎年、年度末が近づくと、将棋ファンの私は名人戦の挑戦者を決める、将棋のA級順位戦の動向が気になりだす。今年は森内名人への挑戦権を、共に名人経験者の谷川と羽生が争う展開になっている。名人戦というと、私が高校生のころ、昭和46年の第30期が特に印象深い。昭和の棋聖と謳われた升田幸三が、大山康晴名人に挑んだ最後の七番勝負は、そのほとんどが石田流で戦われた。石田流は江戸時代からある戦法だが、ハメ手、奇襲のイメージが強く、特に後手番では成立しないとされていた。それに創意工夫を加え、先後かまわず連採して時の大名人をカド番に追い込む升田の奮闘に、私を含む将棋ファンは熱狂した。そしてこの第30期名人戦は、ただ勝敗の帰趨への興味ということを超えて、将棋の進歩とは何か、それはどのように実現されるのかについての示唆を、与えるものでもあったのである。

そもそも将棋は進歩しているのだろうか。たとえば江戸時代には、既に将棋は現在の形になり、家元制度も成立していたが、当時の一流棋士と今のプロ棋士が戦えば、今の棋士が優勢であることはまずまちがいない。当時は戦型の幅が狭く、今は広く深く研究が進んでいるので、その知識の差が大きいと思われる。幕末の家元の実力は、今のアマ初段くらいだったとも言われている。ただし詰将棋は例外で、江戸時代の作品には難解精緻、数百手詰めなどというとんでもないものまであって、そのレベルは今と比べても引けを取らない。

ではその将棋の進歩はどのように行われてきたのか。アマ、プロ問わずよく指されている、居飛車-振飛車対抗型を例にとると、戦前の徒弟制度の時代には相居飛車が主流。弟子が平手で振飛車を指すと師匠に怒られる、という状態だったらしい。しかし戦後、大山、升田といった強豪が採用したことにより、振飛車が一気に広まった。もともと振飛車は、飛車を左に振ったあとの右辺に玉を移動させ、美濃囲いや穴熊囲いに固めることができるので、いったん組み上がると玉の弱い居飛車側が苦しくなる。そこで居飛車側は急戦を仕掛けるが、必ずしもうまく行かない。ところがそのうち、それなら居飛車も玉を固めればよいという発想のもと、居飛車穴熊という戦型が現れた。これが振飛車のお株を奪って大暴れたために、振飛車は一時絶滅に瀕する事態となった。しかし振飛車も巻き返す。「藤井システム」なる急戦策が出て、居飛車側の完成途中の穴熊を壊しに行くようになったため、居飛車穴熊はかつてのような勝率を挙げることができなくなった。将棋には「居玉を避けよ」という、有名な格言がある。しかしこの藤井システムたるや、攻撃を早め、かつ玉を危険地帯に近づけないために、格言を無視して居玉のまま果敢に攻めるのである。ここに至って、居飛車は急戦、振飛車は持久戦志向というかつての常識は逆転した。ただしその後居飛車側の対策も進み、藤井システムの勢いにもややかげりが出て、今に至って

る。

この、居飛車―振飛車対抗型の歴史から見えてくるのは、将棋の戦法は、それまでの常識を覆すことによって進歩してきたということである。かつての「升田式石田流」にも言えることだが、後手石田は不利というような定説や常識、格言、時には直観に逆らい、その裏をかくような柔軟な発想が、戦型の進歩をもたらしてきた。そしてその背後には、特に戦後将棋のきびしい実力主義というのがあるだろう。年長だろうと経験があろうと、王様の頭に金が載ったらおしまい。負ければ八段九段でもどどんクラスが下がって給料は減り、発言力も低下する。いわゆる「盤外戦術」は論外として、盤上では、勝ちさえすれば何でもありの世界である。

科学の世界はどうだろう。まず科学が進歩したかどうかといえば、全体としてはそうだろう。人間が月に行けるようになったのである。しかしたとえば生態学が進歩したかという、ちょっと疑わしい。個々の生物種についての情報の蓄積は別として、科学の命たる理論面において、20世紀の生態学は19世紀を上回っているだろうか。今、生態学の雑誌をにぎわしている trophic cascade や bottom-up & top-downなどは、20世紀生態学が生んだ遷移説、Island Biogeographyなどを越えているのか。さらに後者は、19世紀のダーウィンの進化論よりすぐれていると言えるのか。一方、科学の進歩の見方については、2つの大きな流れがある。大ざっぱに言えばそれは、科学は理論からの仮説の導出と、その反証をくり返しながらか時代と共に洗練されて行くのか、あるいはその時代に優勢な思想的枠組みに支配されつつ、ときにそれが大規模に転換することをくり返すのか、ということになるだろう。この対立は、「科学は着実に進歩している」「いやそんなものはない。ただの流行だ」という二つの極論を背景としているように見えるのだが、そういったことに照らして将棋の場合はどうなのだろうか。

将棋においても、ある戦型が実戦において検証され、反証されるということは日々行われ、それによって戦法は先鋭化する。度重なる反証に耐えた指し方が、「定跡」として生き残っていると考えることもできる。が一方、かつての「振飛車を指すと怒られる」とか、今でも「強い棋士が採用するとその戦型がはやる」などという現象は、実戦による戦法の検証とそれによる進歩、という枠組みだけではとらえ切れない要素が、将棋の場合にも存在することを示している。そもそも格言や常識というものも、より低階層における主観、偏見、流行と言えなくもない。いろいろなレベルでドグマは存在し、人はそれに依拠して物事を進めなければならないが、またそれを打ち破らなければ進歩もない。将棋でも科学でも、それは同じことなのかもしれない。

< S >